

1 学校教育目標			
「未来へかがやけ 蛭っ子！」 ～笑顔いっぱい、生き生きと学び合う児童の育成～			
2 本年度の重点目標	○学び続ける子ども ・意欲的に自主的に学習に取り組む。 ・じつりと考え、伝え合う。 ・進んで読書をする。	○思いやりのある子ども ・当たり前のことが当たり前に見える。 ・自他のよさを認め合いながら助け合う。 ・地域に学び、地域を愛する。	○たくましい子ども ・進んで体を鍛える。 ・規則正しい、健康的な生活を送る。 ・食事のマナーを身につけ、残さず食べる。 ・危機を回避しようとする。



3 総括表

① 学び続ける子ども					年度末評価		
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	評定	成果(○)及び課題(△)	今後の方策
教育活動	○学習習慣の定着	基本的な学習習慣の定着	・話をしている相手を見て、最後まで聞くことができる児童90%を目指す。 ・家庭学習も、怠けずに取り組んでいると答える保護者90%を目指す。	・話を聞く習慣づけの徹底指導 「読む」「書く」「計算」の宿題を継続的に取り組む。 ・「家庭学習の手引」「市宇の習慣づくり」等の保護者への配布・説明を行い学校・家庭が連携して取り組む。 ・定期的「蛭っ子カード」(生活点検表)を実施し、親子で学習・生活習慣を見つめ直ししながら、望ましい学習・生活習慣の定着を図る。	A	○日常の指導及び「学び続ける子の10か条」を作り、意識づけたことにより、話を聞ける児童は9割以上である。また宿題の実施率はほぼ100%である。 ○家庭での学習の実施率は9割以上である。また自学ノートの課題は、各担任の工夫により、ほぼ全員が定期的に取り組んでいるものの、自発的に取り組む児童はまだ多くない。	・これまでの指導を継続して行っていく。 ・自学ノートについては、全校的な共通理解のもと、進んで取り組むための動機づけ(自学賞など)を行う。また、前年度の良ノートの例を児童に紹介したり、保護者にも啓発したりして、家庭学習に自学ノートの活用を促していく。
	●学力の向上	算数科における思考力及び表現力を育てる指導方法の工夫	・算数科における思考力・表現力を高めるための授業づくりを通して、活用力を育てる。 ・算数科の標準学力検査において、各学年全国平均以上を目指す。	・思考力・表現力を高めるような授業づくりを行う。 ・児童の興味・関心・意欲や思考を引き出すための教材の研究・開発を行う。 ・児童の実態に応じた少人数指導・TT指導を充実させる。 ・計算タイムや補充学習において級外職員も加わり、全職員で指導に臨む。	A	○12月までに全学年の授業研究会を実施し、児童の思考力及び表現力の育成について、研修を深めることができた。 ○計算タイムでは、月1回の活用タイムを設け、児童の思考力を伸ばすことができた。 ○標準学力テスト(GRT)では、全学年で全国平均以上が達成できた。	・これまでの指導を継続しつつ、さらに授業づくりや授業改善に努める。 ・少人数指導、個別指導、補充指導などを通して、個に応じた指導の充実を図る。 ・今後も月毎の学習目標を設定し、その月の学習チャンピオンを賞賛していくことで、全校的な気運を高めていく。
	○読書指導	読書指導の推進	・年間平均100冊の読書を達成する児童を各クラス90%以上を目指す。 ・いろいろなジャンルの本に挑戦できる児童を増やす。 ・毎月「テレビ・ノーゲームデー」を実施し、実施率を90%以上にする。	・100冊達成した児童を昼の放送で紹介する。 ・教師や保護者ボランティアによる読み聞かせを実施するとともに、図書館祭りの機会を利用し、読書への意欲を喚起する。 ・「親子読書回覧板」を実施し、家庭でも読書をするきっかけを与える。 ・「テレビ・ノーゲームデー」については、家庭の状況に応じて実践する。保護者にも協力を呼びかけ、家読を勧める。	A	○100冊を達成した児童は2月10月現在で122人/134人で、年度内には100%達成できそうである。 ○教師やボランティアによる読み聞かせを行ったり、廊下「はっと一息読書コーナー」を設置したりしたことで、児童の読書への意欲喚起につながった。 ○「親子読書回覧板」や「テレビ・ノーゲームデー」の取組が親子での読書の機会となった。 ・「図書館祭り」を行ったことで、読書をする子がより増えた。	・いろいろなジャンルの本に挑戦できるように、「図書館ビンゴ」などを行う。 ・「親子読書回覧板」や「ノーテレビ・ノーゲームデー」、「図書館祭り」などを今後も継続して実施していくとともに、内容の充実を図ることで、さらに読書好きの児童を育成していく。
	●ICT活用教育の推進	ICT活用教育指導の推進	・コンピュータや電子黒板、インターネット等を活用して、授業に主体的に取り組む児童を増やす。	・教職員がICTを活用した実践的な教育活動を行うことができるように職員研修の充実を図る。 ・情報化推進リーダーを中心とした校内研修体制を整える。	B	○電子黒板、デジタル教科書などの活用を通して、児童が意欲的に学習に関わることができている。 △ICT利活用の課題は共有できたが、実践例についての研修は十分ではない。	・ICT利活用のための課題に向けて、さらに情報交換や研修の機会を増やし、先進校や他校の実践例などを取り入れていく。
② 思いやりのある子ども					年度末評価		
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	評定	成果(○)及び課題(△)	今後の方策
教育活動	○基本的な生活習慣の定着	奉仕・協力・勤労などの精神や態度の育成	・礼儀正しい児童を目指す。 (あいさつ・返事・言葉遣い・無言掃除・靴並べ・廊下歩行)	・あいさつや返事を上手にできる子をほめ、常に意識させる。 ・掃除の手順や用具の使い方を指導し徹底させる。 ・掃除強化月間を設け、全校で重点的に取り組む。	B	○静かに落ち着いて生活する児童が増えてきており、集合する時や掃除の時間は無言でできるようになってきた。 ○挨拶が苦手な児童を対象にあいさつアンケートを実施するなど、個に応じた指導の成果で、はずかしがらずに挨拶ができるようになってきた。 ○児童が中心となって「あいさつ運動」に取り組んだことで、意識が高まった。	・挨拶や返事については、年間を通して重点目標として位置付けるなど、今後も指導を継続していく。 ・児童を中心としたあいさつ運動を今後も展開していく。 ・月毎に生活目標を設定し、今後も生活チャンピオンとして児童を認めていく。
	○安全対策	危機管理及び安全対策の強化	・自分の身は自分で守るという意識を持つ児童を育てる。 ・登下校のみならず、外出時の防犯ブザーの所持率を100%にする。 ・交通ルールを守り、自転車の正しい乗り方ができるようにする。	・関連機関と連携し、不審者対応避難訓練や交通安全教室を実施する。 ・学級活動、全校朝会等の機会を活用し、自転車の乗り方や身の安全を守る方法を指導する。 ・登校時のPTAや交通指導員の立ち番、下校時の見守り隊との協力体制を維持・継続する。	B	○避難訓練を通して、「自分の身は自分で守る」という意識が高まってきた。 △自転車による事故やけがは今年度は0であったが、学校生活での事故やけがの防止において、自分で意識して取り組めない児童が数名いる。 ○防犯ブザーの所持チェックを毎月行うことで、登下校時の所持率は100%に近づいてきた。 △ただ休日や平日遊びに出かけるときの所持率はおよそ80%で、まだまだ危機管理意識が高まっていない。	・危機管理に対する意識をさらに高めるために、毎日の声掛けや指導を徹底していく。 ・登下校時以外の防犯ブザーの所持について、保護者会などを通じて呼びかけ、家族ぐるみで所持率のアップを図りたい。
	●小学校低学年の学習環境改善の充実	基本的な生活習慣、学習習慣の定着	・あいさつや返事が元気にできる児童90%を目指す。 ・毎日宿題をきちんとできる児童90%を目指す。	・あいさつや返事を上手にできる子をほめ、常に意識させる。 ・決まった量の宿題を出し、宿題はその日のうちに点検し返すようにする。 ・保護者と連携し、協力を得て達成する。	A	○校舎内外で自分から進んで挨拶ができる児童が増えた。 ○宿題については、朝のうちにほぼ100%の児童が提出することができた。	・今後も機会あるごとに声をかけたり、指導したりすることで、さらに意識を高め、実践力を育てていく。
	●心の教育	思いやりの心の育成	・集会活動や縦割り班活動を通して、思いやりのある心、自己有用感を高める。	・学年や全校の場で出番をつくり、達成感を持たせる。 ・縦割り班活動の推進によって、高学年のリーダー性と思いやりの心を育む。 ・集会活動や学習発表会を通して、友だちのよさを認め合う。	A	○平和集会や感謝の会、児童集会などで児童の出番の機会を多く作り、達成感を味わわせることができた。 ○本年度は法務局及び市の指定による「人権の花」事業に取り組んだ。栽培や観察などの活動をおこなって、相手の立場を考慮すること、協力し合うこと、感謝することなど、人権思想に対する理解を体得させることができた。	・集会活動の中にさらに児童の出番を増やしていくことで、高学年のリーダー性と互いに認め合う思いやりの心を育てていく。 ・「学校が楽しい」と思えない児童については、その原因や背景となるものを早くつかむことで、家庭との連携も深めながら目標値の95%以上に高める必要がある。
●いじめの問題への対応	多くの目や手をかける学校及び学級経営	・一人一人のよさを認め合い、いじめのないクラスづくりを目指す。 ・学級が孤立しないよう、同歩調の指導を行い、「学校が楽しい」と言える児童95%を目指す。 ・「予防、早期発見、早期対応、再発防止」を念頭に置き、事案が発生した場合には、組織として迅速かつ丁寧に対応する。	・自分や友だちを大切にし、思いやりの心を育む学級活動や道徳の授業を大切にしている。 ・いじめアンケートを定期的に実施するとともに、教育相談週間を設定する。 ・QUテストを年2回は実施し、比較学級経営力が高まる。 ・職員間において「報告・連絡・相談」を徹底させるとともに、校内いじめ防止対策委員会を開催して、迅速に対応する。また、週に1回行っている「気になる子の情報交換」を充実させ、職員間の共通理解を図る。	B	○本年度は、4月に「いじめに関する児童集会」を、11月には「いじめ防止に関するDVD鑑賞会」、1月には「弁護士によるいじめ防止授業」を実施するなど、いじめの未然防止に取り組んだ。また、QUテストや心のアンケートを実施して、児童の気持ちを捉えたり予防をしたりして、全職員で組織として取り組んだ。 ○いじめに関する認知は数件あったが、噂によるもので、継続性はなく、認知までには至っていない。 △「学校が楽しい」と思っている児童は、年度末のアンケートでは89%で、目標の95%には届いていない。	・QUテストや心のアンケートは、今後も継続して取り組んでいく。また、「気になる子の情報交換」も継続して行い、児童の些細な変化も見逃さないようにしていく。 ・「学校が楽しい」と思えない児童については、その原因や背景となるものを早くつかむことで、家庭との連携も深めながら目標値の95%以上に高める必要がある。	

○特別支援教育	支援体制の確立	・特別支援教育に関する専門性を高めるために年に3回の校内研修を行う。 ・支援を必要としている子を把握し、個に応じた支援を行う。	・関係機関と連携し、専門の講師を招聘して職員研修を行う。 ・児童一人一人の教育的ニーズを把握し、その持てる力を高めるため適切な指導及び必要な支援を行う。 ・個別の支援計画を作成し、個に応じた指導を行う。	A	○巡回相談や、SC、教育相談員などの専門的な立場からアドバイスを受け、支援を要する児童へ効果的にかかることができた。 ○個別の支援計画に沿った支援を行い、個々の基礎的な学力が向上した。 ○特別支援教育に関する校内研修を行うことで、職員の特別支援教育に対する関心や知識が高まってきた。	・通常学級に在籍する支援を要する児童について実態を把握するとともに、全職員の共通理解を図りながら、支援にあたっていく。 ・今後も必要に応じて巡回相談を利用し、専門的なアドバイスを受けていく。
---------	---------	--	---	---	---	--

③ たくましい子ども 年度末評価

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	評定	成果(○)及び課題(△)	今後の方策
教育活動	●健康・体づくりの推進	・心身ともに健康な児童の育成	・体育科の授業の充実を図り、運動が好きな子どもを育てる。(県教委の「体力向上推進事業への参加」) ・遊び場の環境を工夫し、外遊びを奨励する。	・体育の授業づくりについて意見交換をする場を設ける。 ・スポーツレクリエーションや体育委員会の掲示板などを使って外遊びを紹介し、その遊びの楽しさを伝え、外で体を動かして遊ぶようにする。 ・一輪車週間やなわとび週間を設け、達成感や遊びの楽しさを体感させる。	A	○「さかんキッズスポーツチャレンジ」(県教委の体力向上推進事業)の全項目に全学年が取り組むことができた。 ○マラソンタイムやなわとび週間など児童が運動に親しむ機会を設け、全校で取り組むことができた。	・今後も「運動が好きな児童の育成」を目指し、スポーツチャレンジに何度も取り組んでいくような呼びかけや環境整備を行っていく。
	○望ましい生活習慣の形成	・健康的な生活習慣の定着	・「早寝・早起き・朝ごはん」が習慣化できている児童を90%を目指す。 ・年間を通して、立腰・手洗いがい、歯みがき・帽子着用を実践し、自分で健康管理ができる。	・手洗いがい、歯みがきを習慣化し、感染症予防に努める。また、歯科校医・保健センターと連携し、歯科保健指導をすすめる。 ・メディアの影響について知らせ、時間を決めて利用できるようにする。	B	○朝ごはんの喫食率は週1回の調査では100%に達している。また、歯科保健指導も全学年に対して実施することができた。 ○メディアの影響について保健便り等でお知らせをし、啓発することができた。 △学校だけではなく、家庭の理解や協力が不可欠なことが多くなってきている。	・早寝早起きについては、蜜こカードの項目に加えるなどして、実践率を高める。 ・児童保健委員会でも、できていない部分についての対応策を考え、活動の中で取り組ませていきたい。 ・調査の結果については、保護者に対して情報や資料と共にきめ細やかに知らせ、理解や協力をお願いしていく。
	○望ましい食習慣と食の自己管理能力の形成	・食事のマナーを守り、好き嫌いを減らす児童の育成	・食に関する知識と関心を持たせ、好き嫌いを減らす児童を90%以上にする。 ・食器の持ち方や姿勢に気をつけるなど、マナー面での指導を徹底させる。	・食育の授業や給食だより、給食委員会の発表などを通して、食の大切さを知らせる。 ・5月・10月は、担任が実態を把握し、正しいマナーを身につけさせる。	A	○年2回の給食マナー週間を通して、正しいマナーを身に付けることができた。 ○給食便りや児童集会等で、「食の大切さ」を知らせることができた。	・「残菜0」を目指すとともに、食の大切さや色々な人への感謝の気持ちを持つよう啓発及び指導をしていく。

本年度の重点目標に含まれない共通評価項目 年度末評価

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	評定	成果(○)及び課題(△)	今後の方策
学校運営	○魅力ある学校づくり	地域・保護者と連携した児童の育成	・地域人材を活用した体験的な学習活動を行い、豊かな心を育成する。 ・地域関係団体、保護者等と連携して、基本的な生活習慣の徹底を行う。	・各学年に地域人材を生かした学習活動を教育課程に位置づけで実施する。 ・地域関係団体との協議の場を設け、学校の教育活動について理解を求め、支援を要請する。 ・地域・保護者との連携で、あいさつ等の基本的な生活習慣の徹底を図る。	A	○年度当初の計画のもと、保護者や地域コミュニティの協力を得ながら教育活動を展開することができた。 ○本年度は、夏のPTA除草作業を地域コミュニティとタイアップして実施するなど、連携が密になってきた。 △行事を通しての交流は充実している一方で、挨拶などの基本的な生活習慣を身に付けさせることなどについての協議や取組は十分とは言えない。	・無理なく、できる時に、できる人材が集結して効果的に活動できるように体制整備を図ってきたい。 ・家庭教育への支援という視点での協議の場を作り、さらに連携を図った取組を充実させていく必要がある。

●は共通評価項目、○は独自評価項目

4 総合評価

(1)「学び続ける子ども」の育成について  
 ・学習習慣については、本年度新たに「学び続ける子の10か条」や「学習チャンピオンの表彰制度」をつくり、全職員及び全児童共通理解のもと指導及び実践してきた結果、かなり定着してきた。また、各種学力検査においては、4月当初の結果があまり思わしくなかった学年も、指導方法の改善や補充学習など、全職員で指導にあたった結果、12月の県の学習状況調査や1月のCRT(標準学力検査)では向上した。  
 ・本年度は「読書指導の推進」に重点をおいて指導を行ってきたが、本年度は2月末日現在で1人あたりの借り出し冊数は201冊と、かなり増加している。また、図書館教育担当や司書による読書環境の整備充実により、子どもの読書に対する関心意欲も高まっている。  
 (2)「思いやりのある子ども」の育成について  
 ・本年度は、年2回の学校独自の「心のアンケート」やQUテスト、お話(教育相談)週間の実施などに加え、年度初めの「いじめについて考える全校集会」や「いじめ防止に関するDVD鑑賞会」、「弁護士によるいじめ防止授業」などを開催し、いじめの予防や早期対応に努めてきた。また、週に1回、支援の必要な児童についての情報交換や共通理解など、組織としての対応ができている。  
 ・本年度は「人権の花」事業に取り組んだ。栽培や観察などの活動とおして、相手の立場を考慮すること、協力し合うこと、感謝することなど、人権思想に対する理解を体得させることができた。  
 (3)「たくましい子ども」の育成について  
 ・本年度も昨年度に引き続き体育主任を中心に、外遊びの奨励や県教委主催の「スポーツチャレンジ」に参加するなど、体力づくりの面での強化を図ることができた。  
 ・また、健康面でも手洗いがい、励行など、養護教諭を中心に取り組み、インフルエンザ流行期においても、ほんの数名の罹患者に止めることができた。

5 学校関係者評価(2月23日:第3回学校運営協議会より)

・少ない教職員数にも関わらず、様々な取組を行い、一定の成果を上げておられることに感謝したい。  
 ・特に大草野コミュニティと連携した事業に数多く取り組まれ、充実した教育活動を展開されていることは喜ばしいことであるが、一方で教職員の負担感はないか、通常の授業時数の確保ができていないかなどが懸念される。何か新しいことを行う場合は何かを削るなどスクラップアンドビルドも大切である。学校は授業を通して学力をつける「学びの場」であるという本質を失わず、無理のない充実した教育活動を展開して欲しい。  
 ・「安全対策」について、学校での避難訓練など、児童に対する指導、啓発は充実しているようだが、それが保護者や地域にまで浸透しているかという懸念もある。例えば学校の体育館が非常災害時の避難場所になっていることを知らない地域住民もいる。コミュニティスクールとしてそういった安全対策について地域全体で考え、取り組むようになってほしい。

6 来年度の改善策

○来年度も本年度の理念や取組をベースにして、「コミュニティスクール」「チーム大草野」という意識を持って学校、家庭、地域が一体となった教育活動を展開していく。  
 ○来年度は安全対策の一環として、「非常災害時の児童の保護者への引き渡し」に関する訓練も実施し、さらに児童や保護者の危機管理意識の高揚を目指す。  
 ○今年度の重点指導項目である「あいさつ」「無言そうじ」「読書」「自主学習」の推進については、成果が見られてきたが、来年度も継続して指導を重ねていく。また、来年度は「表現力」に力点を入れて指導をし、自分の思いや考えを適切に表現できる児童の育成に努める。

